

## 住戸の表に設置される鉢植えが多すぎる場合のシグナル ー住民の地域コミュニティとの関係を測る指標となり得るかー

佛教大学 正会員 ○水上 象吾

### 1. 研究の背景と目的

都市化の進行により地域コミュニティには変化が生じている。内閣府による「社会意識に関する世論調査」<sup>1)</sup>において、『現在の地域での付き合いの程度』の変遷をみると、「よく付き合っている」<sup>註1)</sup>との回答は、1975年の調査では52.8%だったのに対し1986年には49.0%、1997年は42.3%、2004年は22.3%、2014年は17.6%と低下している。

居住地域の路地は生活に密着した空間であり、住民による共有領域が形成されやすい<sup>2)</sup>。路地は植木鉢の表出や住人の所有物のあふれ出しが多く<sup>3)4)</sup>、路地での鉢植えの緑への水やりや手入れを行う機会の増加は、近所づきあいの頻度を増やす可能性があり、緑や花を通じた会話は地域コミュニティを深める可能性がある。

しかし、路地における鉢植えの緑の設置状況を観察していると、住戸を取り囲み外部からの視線を遮断するような設置をしている事例や、あふれ出した植木鉢が異常に多いと見受けられる場合もある。

以上の問題意識のもと、本研究では、路地に表出された鉢植えの多さに着目し、住民の地域コミュニティとのかかわりの指標となる可能性について検討する。

### 2. 研究の方法

#### (1) アンケート調査・鉢植えの実態調査

京都市中心市街地の中京区、上京区、北区を調査地域とし126の路地<sup>註2)</sup>に接する住戸1000軒を対象にアンケート調査を行った。路地環境や緑についての意識に加え、地域活動の実態について尋ねた(表1参照)。

鉢植えの実態調査については、住戸の表に置かれた植木鉢数を、アンケート調査と同様の場である126の路地にて目視によりカウントした。路地の長さにて除算し1mあたりの植木鉢数を算出した。

表1 アンケート調査の概要

調査対象	京都市中心市街地 126路地に接する住戸
調査票配布数	1000票
配布回収の方法	ポスティングによる配布・ 郵送による回収
配布期間	配布:2012年1月7日～10日 締切:1月23日(ただし2月6日まで回収)
回収数(回収率)	278票(27.8%)

#### (2) 分析方法

路地における植木鉢数とアンケート調査による住民意識

データとの関係を分析する。データ全体から得られる傾向を示し、さらに本研究では一定以上の植木鉢数に着目し考察する。統計的分析としては、相関分析、カイ二乗検定により分析した。有意水準の表示は\*\* $P < .01$ , \* $P < .05$ とする。

### 3. 分析結果

#### (1) 地域活動と鉢植えの関係

126の路地を調査した結果、住戸の表に置かれた植木鉢数は合計13464鉢であった。調査した路地長さの合計は4099mであるため、路地1mあたりの植木鉢数は平均3.3個となった。住民の町会・自治会への参加頻度とその住民の住戸が接する路地1mあたりの植木鉢数との関係を調べたところ、有意な相関関係が認められた( $R = -.152^{**}$ )。植木鉢数が多い路地の住民ほど、町会・自治会への参加頻度が多い傾向が認められる。

ただし、この分析では、路地毎の植木鉢数として平均化した値を用いており、個々の住民の設置した植木鉢数と住民意識との関係ではない。本研究では、アンケート調査にて、自宅の家の前に置いた鉢植え数を4択による回答を個別に得ている(図1参照)。実態調査による路地1m毎の植木鉢数とそこに居住する住民の設置鉢植え数4択の回答のデータは $R = .281^{**}$ にて相関関係が認められる。

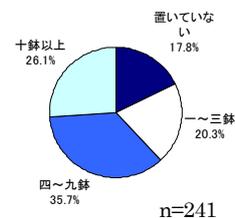


図1 自宅前の鉢植え数

住民の設置鉢植え数と地域の町会・自治会への参加頻度との関係について、図2に示す。鉢植えを「置いていない」との回答者よりも「4～9鉢」との回答者の方が参加頻度が多い傾向が認められる。しかし、「10鉢以上」との回答者は「4～9鉢」との回答者よりも参加頻度が少ない。

同様に、鉢植え数と近所づきあいとしての立ち話の頻度との関係について、図3に示す。鉢植えを「置いていない」との回答者よりも「4～9鉢」との回答者の方が頻度が多い傾向が認められる。しかし、「10鉢以上」との回答者は「4～9鉢」との回答者よりも頻度が少ない。

以上、全体の傾向としては植木鉢数が多い路地の住人ほ

キーワード：路地、鉢植え、表出、地域コミュニティ

連絡先：〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96 佛教大学

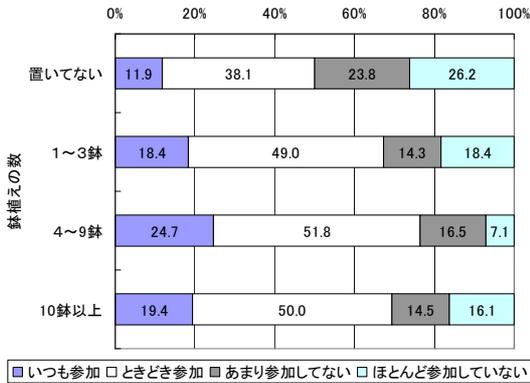


図2 鉢植え数別にみた町会・自治会活動への参加頻度

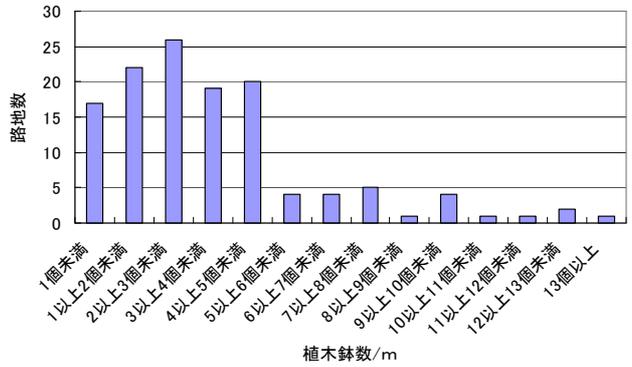


図4 鉢植え数別の路地数

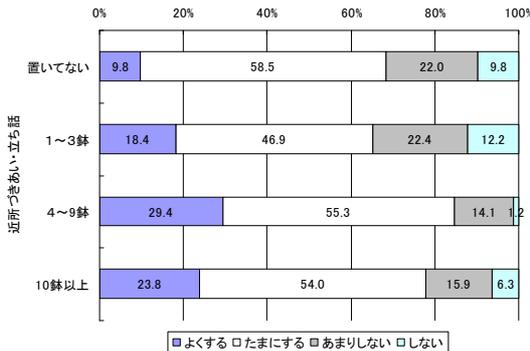


図3 鉢植え数の分類別にみた立ち話の頻度

や会話のきっかけを増やすと考えられ、地域コミュニティとのかかわりが増加する傾向が示される。

しかし、一定以上の鉢植え設置は、外部との壁を形成する役割やテリトリーとしての表出の意味を示すことも考えられる。所持する鉢植え数が多い人は、地域活動や近所づきあいが減少する傾向も示唆されることから、地域との関係が閉鎖的であるシグナルとして捉えられる可能性がある。ただし、設置場所や整理がなされているのか、放置状態で野積みになっているのか等、鉢植えの状態にもよると考えられ、緑の手入れ状態を把握することも必要と考えられる。本研究ではアンケートにより住人の緑の手入れ頻度を主観的に把握したが、これも全体のデータをみると鉢植えが多い人ほど手入れ頻度も高い傾向がみられ、異常な設置数を部分的に探り出すことはできなかった。今後、個別の事例として調査していく必要がある。

註1) 1975年から1997年調査は回答の選択肢文は「親しく付き合っている」となっている。

註2) 路地とは4m以下の幅員を示す場合やコミュニティの分要素として10mを閾値としてみる場合など定義はさまざまあるが、本調査では、幹線道路を除き、居住環境における1m以下の通りから10m意未満の通りまでを対象としている。

付記: 本研究は大学コンソーシアム京都「平成23年度 未来の京都創造研究事業」の助成により行われたものである。

参考文献

- 1) 内閣府「世論調査報告書『社会意識に関する世論調査』
- 2) 湯浅義晴・篠崎健一・青木義次 (1987)「路地空間におけるあふれ出しの発生要因」日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 51-52.
- 3) 青木義次・湯浅義晴 (1993)「開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し:路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証その1」日本建築学会計画系論文報告集, No. 449, pp. 47-55.
- 4) 水上象吾 (2013)「路地における鉢植えの緑の設置状況と居住者意識」環境情報科学 学術研究論文集, No. 27, pp. 209-214
- 5) 京都文教大学人権委員会・京都文教短期大学人権委員会 (2012)「ごみ屋敷の住人たち—専門職が地域活動で出会う人々—」京都文教大学心理社会的支援研究 2, pp. 111-136

ど、地域活動や近所づきあいの頻度が多い傾向が認められるが、鉢植えの設置数が10鉢以上の住民層は頻度が多少下がる傾向がみられる。

それでは、どの程度の植木鉢数が適当と考えられるのだろうか。つぎに、路地における植木鉢数の妥当性について検討し、地域コミュニティの指標となり得るか検討する。

(2) 植木鉢の地域コミュニティ指標としての水準

本調査では、路地毎の植木鉢数をカウントしたが、住戸個別の植木鉢数と住民意識とのデータは整合させていない。アンケートによる4択の鉢植え数は把握したもの、10鉢以上は一括りとしており具体的な数値は明らかではない。仮に1軒で9個の鉢植えを設置していると考え、また、1軒の路地への接道部分の長さを、京町家の場合3間と仮定すると5.4mとなり、路地1mあたりの植木鉢数は1.7個となる。路地の実態調査では、平均3.3個となったが、この値は一部の多くの鉢植えを所持している住戸のデータが平均値を高めたと考えられる。

実態調査で得た路地1mあたりの植木鉢数を1個単位で分類し路地数を調べたところ、104の路地(82.5%)では5個未満となったことから、この水準が一般的な設置状況と捉えられる(図4参照)。なお、1mあたり5個とは、1軒あたりでは27個程度と推定できる。

4. 考察

本研究は路地に表出された植木鉢数に着目し、地域コミュニティへのかかわりの指標となる可能性について検討した。住戸の表に設置された鉢植えの存在は、表に出る機会